

漢籍の日本伝来と馬の関係

静永, 健
九州大学大学院人文科学研究院文学部門

<https://doi.org/10.15017/19835>

出版情報 : 文學研究. 108, pp.33-53, 2011-03-01. 九州大学大学院人文科学研究院
バージョン :
権利関係 :

漢籍の日本伝来と馬の関係

静 永 健

中国の書籍が日本に最初に伝来したのは何時なのか？

そして、それはどのような過程を経て実現したことなのだろうか？

古代中国の先進的な文明や科学技術が、当時はまだ未開であった『倭国』にやってくることは、一見すると、水が高きより低きに流れるように、極めて当然のことのような錯覚があるが、実際にその伝来の過程には、多くの乗り越えねばならぬ困難が伴った筈である。

ただし漢字伝来以前の日本は『無文字社会』に属していたであろう。つまり、独自の言葉（音声）によるコミュニケーションはある程度存在するものの、その言葉を何かに書き記す習慣を持たない社会である。このような社会は、例えば電気の無い生活を想像するようなもので、現代の我々には少なからず奇異の感が懐かれるが、現にアフリカや東南アジアの少数民族の中には幾つも存在が報告されており、二千年前の日本や朝鮮半島の人々も、必ずやそのような状態にあったと想像される。

それを持たずに生活してきた人々が「文字」に接し、如何にしてそれに興味を示すようになったのか？とりわけ発音や書き方も難解である「漢字」を如何にして習得していったのか？このことは、思い描くことすら大変難しい問題であるが、筆者はここに、幾つかの文献資料に基づいて私見を披瀝したい。もとよりそれは、いまだ初歩的な

『推測』の域を出るものでは決していないが、読者諸賢の批正を切に乞うものである。

一、「漢字」の伝来と『漢籍』の伝来時期

「漢字」が何時日本にもたらされたのか？

そして、日本人が「漢字」を独自に読み書きできるようになったのは何時頃のことなのか？

この問題を解く第一の史料がわが福岡・志賀島から出土したとされる「漢委奴国王」の金印である。

この金印は建武中元二年（紀元五七）後漢の光武帝が倭国（倭奴国）の使者に賜与したもので、その記録は范曄『後漢書』東夷伝に記されており、これが日本において現在明確に確認できる「漢字伝来」の最初と考えられている。

建武中元二年、倭奴國奉貢朝賀。使人自稱大夫。倭國之極南界也。光武賜以印綬。安帝永初元年、倭國王帥升等獻生口百六十人、願請見。

建武中元二年（五七）、倭奴國貢を奉じて朝賀す。使人自ら大夫を稱す。倭國の極南界なり。光武賜ふに印綬を以てす。安帝の永初元年（一〇七）、倭國の王帥升等、生口百六十人を獻じ、見へんことを願請せり。

〔『後漢書』東夷伝〕

しかしここで注意すべきなのは「文字（漢字）の伝来」と「書物（漢籍）の伝来」とは同時ではないということである。特にこの金印の僅か五文字だけでは、後漢時代の倭人が果たしてどの程度まで漢字を理解していたかは疑問である。その証拠に、この范曄『後漢書』の記述は、多くの部分が陳寿『三国志』倭人伝（いわゆる魏志倭人伝）

の記述に一致するが、その女王の名前が漢人側からの当て字によって「卑弥呼」と記されることから明らかによろしく、三世紀以前の倭国には、漢字によつて積極的に自分たちのことを記述しようとする習慣を持たなかったと考へてよいであろう。この当時の倭人は「金印」や「銅鏡銘」などを通して漢字を目にする機会があつても、その意味を理解し、みずから文章として読み書きするまでには至らなかつた（その必要性を認識していなかつた）のである。以下に『三国志』倭人伝の一部を引用するが、先にも述べたように「卑弥呼」をはじめ、記述される倭人の人名は、すべて当て字（借音表記）によつて記されている。

景初二年六月、倭女王遣大夫難升米等詣郡、求詣天子朝獻。太守劉夏遣吏將送詣京都。其年十二月、詔書報倭女王曰、制詔親魏倭王卑彌呼。帶方太守劉夏遣使送汝大夫難升米・次使都市牛利、奉汝所獻男生口四人・女生口六人・班布二匹二丈以到。汝所在踰遠、乃遣使貢獻、是汝之忠孝、我甚哀汝。今以汝爲親魏倭王、假金印紫綬。裝封付帶方太守假授汝。其綬撫種人、勉爲孝順。汝來使難升米・牛利涉遠、道路勤勞。今以難升米爲率善中郎將、牛利爲率善校尉、假銀印青綬、引見勞賜遣還。今以絳地交龍錦五匹・絳地縵粟罽十張・犂絳五十匹・紺青五十匹、答汝所獻貢直。又特賜汝紺地句文錦三匹・細班華罽五張・白絹五十匹・金八兩・五尺刀二口・銅鏡百枚・眞珠・鉛丹各五十斤。皆裝封付難升米・牛利還到錄受。悉可以示汝國中人、使知國家哀汝。故鄭重賜汝好物也。

景初二年（二三八）六月、倭の女王 大夫難升米等を遣はして郡に詣らしめ、天子に詣りて朝獻せんことを求む。（帶方郡）太守劉夏 吏將を遣はして京都に送詣せしむ。其の年の十二月、詔書もて倭の女王に報じて曰く、「親魏倭王卑弥呼に制詔す。帶方太守劉夏 使を遣はして汝の大夫難升米・次使都市牛利を送り、汝の獻ずる所の男生口四人・女生口六人・班布二匹二丈を奉りて以て到る。汝の在る所は踰遠なるに、乃ち遣使貢

献するは、是れぞ汝の忠孝にして、我は甚だ汝を哀しむ。今汝を以て親魏倭王と為し、金印紫綬を仮けん。装封して帯方太守に付して汝に仮授す。其れ種人を綏撫し、勉めて孝順たらしめよ。汝の來使難升米・牛利は遠きを涉り、道路に勤勞す。今難升米を以て率善中郎將と為し、牛利をば率善校尉と為し、銀印青綬を仮け、引見勞賜して還さしめん。今絳地の交龍錦五匹・絳地の縵粟罽十張・縹絳五十匹・紺青五十匹を以て、汝の献貢せし所の直に答へん。又特に汝に紺地の句文錦三匹・細班華罽五張・白絹五十匹・金八両・五尺刀二口・銅鏡百枚・真珠・鉛丹各五十斤を賜ふ。皆装封して難升米・牛利に付して還り到して録受せしめん。悉く以て汝の国中の人に示し、わが国家の汝を哀しめるを知らしむべし。故に鄭重に汝に好物を賜ふなり。」

〔三国志・魏書・倭人伝〕

このように『無文字社会』であつたと想像される倭国であるが、その後数百年の時を経て、ようやく「漢字」を独自に読み書きできるようになる。すなわち次に掲げる沈約『宋書』倭国伝や『梁書』倭国伝の記述を見ると、倭国王の名が借音での表記から、王たるにふさわしい意味を備えた実字での表記に変化するのである。しかも倭王側から中国の皇帝に対し「安東將軍、倭国王」などの正式な称号を求められている。日本の「漢籍伝来」はこの「卑弥呼」（三世紀）から「讚」（五世紀）の頃までの間のことと見るべきであろう。

倭國在高驪東南大海中、世修貢職。高祖永初二年詔曰、倭讚萬里修貢。遠誠宜甄、可賜除授。太祖元嘉二年、讚又遣司馬曹達奉表獻方物。讚死、弟珍立。遣使貢獻。自稱使持節都督倭百濟新羅任那秦韓慕韓六國諸軍事安東大將軍倭國王、表求除正。詔除安東將軍倭國王。珍又求除正倭隋等十三人平西・征虜・冠軍・輔國將軍號。詔並聽。二十年、倭國王濟遣使奉獻、復以爲安東將軍倭國王。二十八年、加使持節都督倭新羅任那加羅秦韓慕

韓六國諸軍事。安東將軍如故。并除所上二十三人軍郡。濟死、世子興遣使貢獻。世祖大明六年、詔曰、倭王世子興、奕世載忠、作藩外海。莫化寧境、恭修貢職。新嗣邊業、宜授爵號。可安東將軍倭國王。興死、弟武立。自稱使持節都督倭百濟新羅任那加羅秦韓慕韓七國諸軍事安東大將軍倭國王。順帝昇明二年、遣使上表曰……

倭国は高驪の東南の大海中に在り、世よ貢職を修む。高祖の永初二年（四二二）詔して曰く、「倭の讚万里に修貢す。遠誠宜しく甄すべく、除授を賜ふべし。」太祖の元嘉二年（四三五）、讚又司馬の曹達を遣はし表を奉じて方物を献す。讚死し、弟の珍立つ。遣使貢獻す。自ら使持節・都督倭百濟新羅任那秦韓慕韓六國諸軍事・安東大將軍・倭国王を称し、表もて除正を求む。詔して安東將軍・倭国王に除す。珍又倭隋等十三人に平西・征虜・冠軍・輔国將軍の号を除正せられんことを求む。詔して並びに聽す。二十年（四四三）、倭国王濟遣使奉獻し、復た以て安東將軍倭国王と為す。二十八年（四五二）、使持節・都督倭新羅任那加羅秦韓慕韓六國諸軍事を加ふ。安東將軍は故の如し。並びに上ぐる所の二十三人に軍および郡に除す。濟死し、世子興遣使貢獻す。世祖の大明六年（四六二）、詔して曰く、「倭王の世子興は、奕世載忠にして、藩を外海に作る。化を稟け境を寧んじ、貢職を恭修す。新たに辺業を嗣ぐに、宜しく爵号を授くべし。安東將軍・倭国王たるべし。」興死し、弟武立つ。自ら使持節・都督倭百濟新羅任那加羅秦韓慕韓七國諸軍事・安東大將軍・倭国王を称す。順帝の昇明二年（四七八）、遣使上表して曰く……

〔宋書 倭国伝〕

漢靈帝光和中、倭國亂。相攻伐歷年、乃共立一女子卑彌呼爲王。彌呼無夫婿、挾鬼道、能惑衆。故國人立之。有男弟、佐治國。自爲王、少有見者。以婢千人自侍。唯使一男子出入傳教令。所處宮室、常有兵守衛。至魏景初三年、公孫淵誅後、卑彌呼始遣使朝貢。魏以爲親魏王、假金印紫綬。正始中、卑彌呼死、更立男王。國中不服、更相誅殺。復立卑彌呼宗女臺與爲王。其後復立男王、並受中國爵命。晉安帝時、有倭王贊。贊死、立弟彌

彌死、立子濟。濟死、立子興。興死、立弟武。齊建元中、除武持節督倭新羅任那伽羅秦韓慕韓六國諸軍事鎮東大將軍。高祖即位、進武號征東大將軍。

漢（後漢）の靈帝の光和中（一七八～一八四）、倭国乱る。相攻伐すること歴年、乃ち一女子卑弥呼を共立して王と為す。弥呼、夫婿無く、鬼道を挟し、能く衆を惑はす。故に国人之れを立つ。男弟有り、治国を佐く。（卑弥呼が）王と為りてより、見る者有ること少なり。婢千人を以て自侍せしむ。唯だ一男子をして出入し教令を伝へしむ。処る所の宮室、常に兵の守衛する有り。魏の景初三年（二三九）、公孫淵の誅せられし後に至り、卑弥呼始めて遣使朝貢す。魏以て親魏王と為し、金印紫綬を仮く。正始中（二四〇～二四九）、卑弥呼死し、更へて男王を立てんとす。国中服さず、更に相誅殺す。復た卑弥呼の宗女台与を立てて王と為す。其の後復た男王を立て、並びに中国の爵命を受く。晋の安帝の時（三九六～四一八）、倭王贇有り。贇死し、弟弥（筆者注…けだし珍の異体字 珎の誤写ならんか）立つ。弥死し、子濟立つ。濟死し、子興立つ。興死し、弟武立つ。斉の建元中（四七九～四八二）、武を持節・督倭新羅任那伽羅秦韓慕韓六国諸軍事・鎮東大將軍に除す。高祖即位（四七九）し、武を進めて征東大將軍を号せしむ。「梁書」倭国伝

日本の歴史研究者によつて、この「讚（贇）」「珍（弥）」「濟」「興」「武」は、一般に「倭の五王」と呼ばれている。そして恐らくその最後の王「武」は、日本の第二十一代天皇の雄略天皇（推定在位四五六～四七九）だとされる。また、この倭王武は雄略天皇の時代、日本国内でも明らかに日本人による漢字の使用例が発見されている。東京の北、埼玉県行田市の稲荷山古墳から出土した鉄剣に刻まれた雄略天皇の和名を記した金象嵌の銘文である。

辛亥年七月中記。乎獲居臣上祖名意富比瓊、其兒多加利足尼、其兒名弓己加利獲居、其兒名多加披次獲居、其

兒名多沙鬼獲居、其兒名半弓比、

〔以上、表面銘文〕

其兒名加差披余、其兒名乎獲居。世々爲杖刀人首、奉事來至今。獲加多支鹵大王寺在斯鬼宮時、吾左治天下。令作此百練利刀、記吾奉事根原也。

〔以上、裏面銘文〕

辛亥年（四七一）七月中記す。乎獲居臣、上祖の名は意富比埵、其の兒は多加利足尼、其の兒の名は弓已加利獲居、其の兒の名は多加披次獲居、其の兒の名は多沙鬼獲居、其の兒の名は半弓比、其の兒の名は加差披余、其の兒の名は乎獲居。世々杖刀人の首と爲り、事を奉じて至今に来る。獲加多支鹵大王（＝雄略天皇）の寺の斯鬼宮に在りし時、吾天下を左治す。此の百練の利刀を作らしめ、吾が奉事の根原を記すなり。

この鉄劍銘には、人名や地名を倭語で表記する以外は、干支等ほぼ中国文で記されており、日本国内にも少しづつ中国の漢字文化が滲透しつつあることがわかる。

雄略天皇の鉄劍はさらにもう一つ、熊本県玉名市の江田船山古墳からも出土している。これは銀象嵌で、鉄劍の峰の部分に銘文が刻まれている。

治天下獲加多支鹵大王世、奉事典曹人、名无利弓。八月中、用大鍬釜、作四尺廷刀。八十練、九十振、三寸上好刀。服此刀者、長壽子孫洋々、得恩也。不失其所統。作刀者名伊太和。書者張安也。

天の下治す獲加多支鹵大王の世、奉事せる典曹人、名は無利弓。八月中、大鍬釜を用て、四尺の廷刀を作る。八十練、九十振、三寸の上好刀。此の刀を服する者は、長寿にして子孫洋々、恩を得るなり。其の統ぶる所を失ふ不れ。作刀者の名は伊太和。書者は張安なり。

同じ王の名を持つ二振りの鉄剣が、一つは日本の関東平野から、そしてもう一つは九州から出土したことは、この頃の倭王の支配圏がすでに現在の日本国の半分以上を占める広大なものになっていたことを証明している。ただし、この鉄剣銘で注目されるのは後者の銘文の「書者」が張安という中国名を名乗ることである。この人物は恐らく中国、もしくは朝鮮半島から日本にやってきた渡来人であろう。日本の人々が漢字を読み書きできるようになるには、まずはこのような人物が教師役をつとめ、徐々にその技術が定着していったと考えられるのである。

二、日本人が漢籍を読み始めたのは何時か？

世界の文字文化の中でも、漢字は画数も多く複雑な部類に属する。このような文字を、みずから自発的に読み書きできるようになるためには、相応の理由が無くてはならない。単に「優秀な文明技術」だからというだけでは、その伝播は不可能であろう。例えば、前章に述べた通り、日本と中国とはすでに後漢初期から国交を持っており、金印の授与なども行われていた。しかし当時の日本人はその後数百年間、ほとんど自発的に漢字を習得しようとはせず、自らの王の名前にも「卑弥呼」という当て字を受け入れるしか無かったのである。

日本人が最初に「漢籍」を読み始めたのは何時か。このことについて筆者は日本に伝存する歴史文献、すなわち『古事記』『日本書紀』の二つの歴史書の記述に注目する。

百濟國主照古王、以牡馬壹疋、牝馬壹疋、付阿知吉師以貢上。亦貢上横刀及大鏡。又科賜百濟國、若有賢人者貢上故、受命以貢上人。名和邇吉師。即論語十卷、千字文一卷、并十一卷、付是人即貢進。

百濟國主の照古王、牡馬一疋、牝馬一疋を以て、阿知吉師に付して以て貢上れり。亦た横刀と大鏡とを貢上

れり。(応神天皇は)又百済国に「若し賢人有らば貢上れ」と科賜ひしが故に、命を受けて以て貢上れる人あり。名は和邇吉師。即ち『論語』十卷、『千字文』一巻、并せて十一巻をば、是の人に付して即ち貢進れり。

『古事記』卷中、応神紀

十五年秋八月、壬戌朔丁卯、百済王遣阿直岐貢良馬二匹。即養於輕坂上厩、因以阿直岐令掌飼。故號其養馬之處曰厩坂也。阿直岐亦能讀經典。即太子菟道稚郎子師焉。於是天皇問阿直岐曰、如勝汝博士亦有耶。對曰、有王仁者、是秀也。時遣上毛野君祖荒田別、巫別於百済、仍徵王仁也。……(中略)……十六年春二月、王仁來之。則太子菟道稚郎子師之。習諸典籍於王仁、莫不通達。故所謂王仁者是書首等之始祖也。是歲、百済阿花王薨。

(応神天皇)十五年秋八月、壬戌の朔にして丁卯、百済王阿直岐を遣して良馬二匹を貢す。即ち輕坂上厩に養ひ、因りて阿直岐を以て掌り飼はしむ。故に其の養馬の処を号して厩坂と曰ふなり。阿直岐は亦た能く經典を読む。即ち太子の菟道稚郎子焉を師とせり。是に於て天皇阿直岐に問ひて曰く、「如し汝に勝る博士は亦た有るや」と。對へて曰く、「王仁といふ者有り、是れ秀でたるなり」と。時に上毛野君が祖の荒田別、巫別を百済に遣して、仍りて王仁を徵せり。……(中略)……十六年春二月、王仁來り。則ち太子の菟道稚郎子之れを師とす。諸の典籍を王仁に習ひ、通達せざるは莫し。故に所謂王仁は、是れ書首等の始祖なり。是の歳、百済の阿花王薨せり。

『日本書紀』卷十、応神紀

これらの古記録は、漢字で書かれてはいるが、人名や地名を借音で表記し、また文法においても、その当時の独特の法則に従って書かれているため、中国の人にはもちろん、現代の日本においても難解である。ただし、ここに掲げた二つの記述を並べ、その相互を補いつつ読めば、比較的理解し易い部分だと思われる。すなわち、第十五代応神天皇の時代、朝鮮半島南部の百済国から雌雄二頭の馬と刀劍、銅鏡などが送られてきた。馬は生き物であるた

め当然飼育員が同行する。そして、その飼育員（名は阿知吉師あるいは阿直岐）は何らかの「経典」を携えて来て、それをしきりに読んでいる。すると、皇太子である菟道稚郎子がそれに興味を懐き、飼育員に付き従って書籍を読み始めたというのである。

日本人で最初に漢籍を読んだ人間が誰なのか特定できるというのは、少し訝しく思われるかもしれないが、筆者はこの記述をほぼ事実を伝えるものだと考えている。というのは、漢字を習得し、その基本的な読書法を一から身につけるには、既に一〇代を過ぎた成人では困難で、必ずや五、六歳の幼児であるべきである。また、漢字を教わったのが中国人からではなく、朝鮮半島の「百済国」の人であるという事実も重要で、もし中国人から直接的に漢字を教わったのなら、恐らくその文法構造は伝統的な正規の中国文の文法に則り、その文字表記も、一層中国風に統一され、更に本格的な使用法に則ったものとなったと思われる。しかし『万葉集』の漢字表記にもわかるように、古代日本人の漢字の使用は、中国から見るとかなり恣意的で、その規則性が緩やかなように思われる。古代日本人は、恐らく自分たちの当時の言語に近似した古代朝鮮の人々から、その漢字の意味や使い方を手ほどきされたものと見てよいであろう。古代朝鮮語を橋梁として日本人は中国の文字を学んだのである。筆者は、この菟道稚郎子（宇治に封土を持つ幼い皇子）こそ、「伝説」ではなく「事実」として最初に漢籍を読んだ日本人だと考えるものである。

ところで、この菟道稚郎子と阿直岐（阿知吉師）との出会いは何時のことなのかを考える必要がある。『日本書紀』では「応神天皇十五年」（即ち西暦二八四年）としているが、この書物の紀年には多くの問題がある。また『古事記』の記述に見える百済の「照古王」とは、第五代肖古王（在位一六六～二二三）なのか、後世の第十三代近肖古王（在位三四六～三七四）なのかが不明確である。

そこで筆者は先の『日本書紀』引用部分の末尾に見える「阿花王の葬去」という事実を根拠として、これを第十

七代「阿莘王」を指すと考える。朝鮮半島の歴史書『三国史記』に拠れば、その薨去は西暦四〇五年九月。従つて王仁の日本渡来はこの年、また、それに先行する阿直岐の渡来はその前年か、或はその二丁三年前のことであると推測される。ちなみに西暦四〇五年は中国では東晋王朝の末期、安帝の義熙元年に当たる。中国文学史において注目されるのは、陶淵明が彭沢令を辞し、帰郷の途上に「歸去來辭」を詠じたのがこの年である。

閑話休題。菟道稚郎子が本格的な漢文教師とも言うべき王仁から習つた課本が『論語』と『千字文』であるといふことは、まことに適切な教程であろう。そこで更に考えるべきなのは、その前段階である阿直岐との出会いにおいて、彼らがまずどのような書物を目にしたのか？ということである。つまり、馬の飼育に従事する者が何故「経典」を読むことができるのか、また、それはいったいどのような書物なのか、という疑問である。

筆者はここに、ある一冊の書物を想定したいと思う——すなわち『相馬経』である。

阿直岐が何故「経典」が読めたのか。それは単なる偶然ではなく、当時の馬（特に国王をはじめとする貴人が騎乗し、あるいは馬車に繫ぐ馬）を飼育する者であれば誰しもが身につけているべき必須事項だったと想像される。そして、彼らが馬とともに携行していた書物は、現在は書名とその断片が諸書に引用されて残る『相馬経』だと推定されるのである。例えば次のような断片が残されている。

相馬経云、一筋從玄中出、謂之蘭筋。玄中者、目上陷如井字。蘭筋堅者千里。

『相馬経』に云く、一筋の玄中より出づ、之れを蘭筋と謂ふ。玄中とは、目の上の陥めること井の字の如きところなり。蘭筋の堅き者は千里なり。【『文選』卷四十一、陳琳「為曹洪与魏文帝書」李善注所引】

百済国の阿直岐は雌雄二頭の馬とともに日本にやって来た。雌雄の馬にはやがて仔馬が産まれる。そのような時、

『相馬経』は、新生馬の能力を見定めるための重要なマニュアルとして取り扱われたのだと思われる。

だが面相には吉相もあれば凶相もある。新生馬が次のような条文に符合した場合、阿直岐は天を仰いで嘆息したところだろう。

伯樂相馬經曰、馬白額入口至齒者、名曰榆雁、一名的盧。奴乘客死、主乘棄市。凶馬也。

『伯樂相馬経』に曰く、馬の白き額ありて口に入りて齒に至る者、名づけて「榆雁」と曰ふ、一名は「的盧」。

奴乗れば客死し、主乗れば棄市せらる。凶馬なり。 『世説新語』徳行篇、劉孝標注所引

『相馬経』は、中世以降その存在意義が忘れられ、現在はその章句のほとんどが亡佚しているが、当時においては王の権威と安全を保障する大変重要な書籍であつたと思われる。阿直岐が携行していた経典とは、必ずやこのような内容の書物であつたのではなからうか。

これに先立つ少し前の時代、すなわち中国の所謂三国鼎立の時代、馬とその相書は大変重要視されていた。『三国志』の英傑呂布が赤兎馬に騎つて奮戦したことは、最近では日本の若者にもよく知られている事実である。兎のように赤い眼球を持つこの馬は、その相貌の特徴より命名された驛馬であろう。陳寿『三国志』にはこのほかに馬相を善くした人物が記されている。『魏書』方伎伝に立伝されている朱建平は、文帝曹丕の馬を一見し、その馬が今日死ぬことを予言する。するとその馬は、文帝の衣に焚かれた香を嫌つて暴れ出し、あやまって帝の膝を噛んだがために殺されたのであつた。馬相の方法とその書物は、恐らく前代からも存在したであろうが（実際に湖南省の馬王堆墳墓から相馬経と目される竹簡が出土している）、その需要が急速に増し、またその精度も高められたのがこの三国動乱の時期であつたと思われる。そしてその書物は、実際の生きた馬とともに、周辺諸地域の王族

たちにも次々と伝えられ、やがて朝鮮半島を経て、いよいよ五世紀の初めには倭国にも将来したのである。

ここでこの当時の馬に関する興味深い伝承を取り上げたい。同じく三国志の英傑劉備が騎っていたとされる有名な「的盧馬」の故事である。

世語曰、備屯樊城、劉表禮焉、憚其爲人、不甚信用、曾請備宴會、蒯越・蔡瑁欲因會取備、備覺之、僞如廁、潛遁出。所乘馬、名的盧。騎的盧走。墮襄陽城西檀溪水中、溺不得出。備急曰、的盧、今日厄矣、可努力。的盧乃一踊三丈、遂得過、乘桴渡河。中流而追者至、以表意謝之曰、何去之速乎。

『世語』に曰く、(劉)備樊城に屯せしとき、劉表焉を礼せんとするも、其の人と爲りを憚り、甚だしくは信用せず、曾ち備を請きて宴會す。蒯越・蔡瑁、会に因りて備を取さんと欲す。備之れを覺り、僞りて廁に如きて、潜かに遁出す。乗る所の馬、名は的盧。的盧に騎りて走く。襄陽城の西のかた檀溪の水中に墮ち、溺れて出づるを得ず。備急て曰く、「的盧よ、今日ぞ厄せるか！努力すべし」と。的盧乃ち一踊すること三丈、遂に過ぐるを得、桴に乗りて河を渡る。中流にして追ふ者至り、(劉)表の意を以て之れに謝して曰く、「何ぞ去ることの速きや」と。

『三国志』蜀書先主伝、裴松之注所引

この一節は後世の『三国志演義』にも見えるため、細部の説明は無用であろう。しかし、ここで見逃してはならないのが、劉備の騎乗する馬が先の『伯樂相馬經』断片に見えた「凶馬」の名前だということである。劉備は凶相の馬であることを知りながら、その馬を手放すことなく敢えて騎り続けていたのである。筆者が推測するのは、當時伝わっていた『相馬經』とは、馬の潜在能力を見分けるマニュアル本であったと同時に、単にそのみに終始せず、凶運の相の馬を見つけた場合の対処法についても少なからず言及があったであろうと思われることである。

吉相の馬はそれでよい。しかし、万が一にも凶相の馬を持った場合、あるいは、永年飼育していた馬にとんでもない凶相が見つかった場合、いったいどのように対処すればよいのだろうか？——筆者は、この不安な気持ちこそ、漢籍、そしてそこに記された古代中国の伝統思想が、東北アジア各地に徐々に滲透してゆく端緒になったと考える。「漢籍はこんなにも役に立つものなのだ。」「漢文を読むと、こんなにも安心した素晴らしい生活が送れるのだ。」という確信こそが、それまで約数百年間にわたる停滞を破り、漢籍がはじめて朝鮮半島や日本などアジアの周縁地域の人々にまで広がってゆく原動力になったと考えるものである。

「的盧」の話は、実は劉備以外の人物の故事としても伝わっている。先に『相馬経』断片を引用した『世説新語』徳行篇の本文である。

庾公乗馬有的盧、或語令賣去。庾云、賣之、必有買者、即當害其主。寧可不安己、而移於他人哉。昔孫叔敖殺兩頭蛇、以爲後人。古之美談。效之、不亦達乎。

庾公の乗れる馬に的盧有り、或ひと語けて売り去らしむ。庾云、「之れを売らば、必ず買ふ者有り、即ち當に其の主を害すべし。寧んぞ己に安んぜずして、他人に移すべけんや。昔孫叔敖、兩頭の蛇を殺すは、後人を以て爲へばなり。古の美談なり。之れに效へば、亦た達せざらんや」と。『世説新語』徳行篇

みずからに降りかかった凶運に我々は如何に対処すればよいのだろうか。庾亮（二八九〜三四〇）も、劉備に同じく、その馬を大切に扱い、いつまでも騎り続けることによって、その凶運を克服したのである。

なお庾亮の言説には、更に次に引用する賈誼『新書』に見える楚の令尹孫叔敖の故事が、その行動の根拠として挙げられている。

賈誼新書曰、孫叔敖爲兒時、出道上、見兩頭蛇、殺而埋之。歸見其母泣。問其故、對曰、夫見兩頭蛇者必死。今出見之、故爾。母曰、蛇今安在。對曰、恐後人見、殺而埋之矣。母曰、夫有陰德、必有陽報。爾無憂也。後遂興於楚朝、及長、爲楚令尹。

賈誼『新書』に曰く、孫叔敖そんしゅくごう 児たりし時、道上に出でて、兩頭の蛇を見、殺して之れを埋む。歸りて其の母に見えて泣く。其の故を問ふに、對へて曰く、「夫れ兩頭の蛇を見し者は必ず死す。今出でて之れを見たり、故に爾り」と。母曰く、「蛇は今安いくに在りや」と。對へて曰く、「後人の見るを恐れ、殺して之れを埋めたり矣」と。母曰く、「夫れ陰徳有れば、必ず陽報有り。爾なほは憂ふること無し」と。後、遂に楚朝を興し、長ずるに及びて、楚の令尹たり。」
『世説新語』德行篇、劉孝標注所引

陰徳には陽報あり。すなわち気づかれることのない他者への思いやりこそ、凶運を克服する唯一の手段であると説くのである。人間の運命には禍福がある。それは仕方のないことなのだ、その人の心懸け次第では、それをうまくコントロールすることができる。これらの説話のコンセプトは、古くは『淮南子』人間訓に見える「塞翁が馬」の故事などにも共通するだろうが、概して馬にまつわる話が多いようにも思われる。すなわち、中原に発祥する中国伝統思想が、異民族の住む広範囲な地域にも伝播していった要因には、このような大変わかりやすい故事（馬の故事）がその嚆矢として重要な役割を果たしていたのではなからうか。そして、これらの故事こそが、『論語』に先だつて、文字を持たぬ周辺諸民族にも次第に受け容れられ、やがて漢字文化圏というべき大きな繋がりをおの地球に作り上げていったと考えられるのである。けだし、日本の古記録に見える馬と漢籍との関係は、東アジア世界における漢字文化の伝播という点に關しても、大変重要な意義を持つているように思つのである。

ちなみに、日本人初の漢籍を読んだ皇子菟道稚郎子は、その後どうなったのか？

彼は漢籍に基づき深い知識を修得し、父応神帝からも将来を嘱望されていたのだが、「弟である」という理由から、かたくなに皇位を拒み続け、兄（第十六代仁徳天皇）に皇位を譲って自決する。彼の漢籍の素養は、却って彼の命を奪ったものよりである（この点、『史記』伯夷叔齊列伝が想起される）。しかし、菟道皇子から皇位を受け継いだ仁徳帝は、歴代の天皇の中でもその尊号が示すとおり素晴らしい善政を布いた天皇として崇められ、その比定される陵墓は、前方後円墳の中でも日本最大級の面積を誇っている（大阪府堺市の大仙陵古墳）。彼もまた弟とともに最初に漢籍を学んだ日本人なのである。

三、三、五世紀の中国文学と周縁世界

さて、ここまでは中国の漢籍文化が朝鮮半島や日本に如何に伝わったのかという問題について考えてきた。最後に筆者は、視点を逆転し、漢籍文化がアジア各地に広がったこの時期の中国文学について考えてみたいと思う。

多くの物理現象がそうであるように、物事の伝達は一方通行ではなく、必ず双方向に行われるものである。倭国に漢籍が伝来し、倭人が少しずつながら漢籍を読み書きし始めた頃、中国の知識人もそのような周縁世界に対して関心を強く持ち始めたはずである。その最も顕著な事例が陳寿（二三三～二九七）『三国志』地理志の記述である。現在でも日本古代史研究の重要な焦点がここに収められた「倭人伝」（通称魏志倭人伝）を読み解くことにある。しかし、筆者はそれだけではないと思っている。

『文選』に収められている左思（二五三～三〇七）『三都賦』の、特に『呉都賦』は、単に呉の都城（南京？或は蘇州？）を描くだけでなく、かつて孫呉政権が支配していた広大な地域についての情報が満載されている。

島嶼綿邈 洲渚馮隆

曠瞻迢遞 迴眺冥蒙

珍怪麗 奇隙充

徑路絶 風雲通

洪桃屈盤 丹桂灌叢

瓊枝抗莖而敷藥

珊瑚幽茂而玲瓏

島嶼は綿邈とつづき、洲渚は馮隆とそびえ、

曠びると瞻れば迢遞として、迴かに眺むれば冥蒙たり。

珍怪いきものは麗き、奇隙なるものは充ちあふれ、

徑路は絶へ、風と雲のみぞ通ず。

洪桃は屈盤し、丹桂は灌叢す。

瓊の枝は莖を抗げて藥を敷きつめ、

珊瑚は幽茂して玲瓏とかがやく。

「左思「吳都賦」、その一三九句〜一五〇句」

この部分は必ずしも日本のみを指すものではないが、すでに大陸を離れ、大海原に点在する亜熱帯の群島を描いていることは確かである。日本および東南アジアの『島嶼』部は、この当時の中国知識人にとって、すでに空想の世界からいよいよ現実の中の可視的なものへと変わりつつあったのである。

「三都賦」は、恐らく本文のみが単独で書き写されて読まれたのではなく、皇甫謐（二二五〜二八二）の序文や劉逵、張載、衛権（瓊）など同時代人の幾つかの注釈が付属したものであったと想像される（すると字数もかなり膨大なものになる）。西晋洛陽の人々がこの賦を争って書き写し、その紙価を高騰させたというのは、単なる読書人的な興味関心からだけではなかったと想像されるのである。現在、筆者は勤務校九州大学大学院の授業で、毎週少しずつこの「三都賦注」を会読しているが、その注釈は、単なる字句説明にとどまらず、まさに百科全書的なさまざまな内容が盛り込まれている。

其竹則篔簹箨 桂箭射筒 其の竹には則ち篔簹・箨・箨・射筒あり。

柚梧有篔 篔簹有叢 柚梧は篔を有り、篔・篔は叢を有る。

【劉逵注】異物志曰、篔簹、生水邊。長數丈、圍一尺五六寸、一節相去六七尺、或相去一丈。廣陵界有之、始興以南又多。小時、夷人績以爲布葛。……(中略)……篔竹、有毒。夷人以爲觚刺獸。中之則必死。

【劉逵注】『異物志』に曰く、篔簹は、水辺に生ず。長さ數丈、圍一尺五六寸、一節の相去ること六七尺、或もの相去ること一丈。広陵の界に之れ有り、始興より以南も又多し。小時、夷人績ぎて以て布葛を爲る。……(中略)……篔竹は、毒有り。夷人以て觚を爲りて獸を刺す。之れに中れば則ち必ず死す。

「左思「吳都賦」その二四三句「一四六句、およびその注」

劉逵注が引用する『異物志』(後漢・楊孚撰とされる)に見える「夷人」とは、現在のどのあたりに住んでいた民族であるかは不明だが、日本を含む東南海中に生活する非漢人集団の習俗を伝えるものである。

また次の劉逵注には、こんどは志怪小説めいた伝承も抄録されている。

其上則猿父哀吟 獬子長嘯 其の上は則ち猿父の哀吟し、獬子の長嘯するあり。

【劉逵注】吳越春秋曰、越有處女、出於南林之中。越王使使聘問以劍戟之事。處女將北見於越王。道逢老翁自稱袁公。袁公問處女、吾聞子善爲劍術。願一觀之。女曰、妾不敢有所隱。唯公試之。於是袁公即跪、拔劍斬箨箨竹。竹槁折墮地。處女接末、袁公操本、以刺處女。處女應節入之三尺、因擧杖擊之。袁公即飛上樹、化爲白猿、遂別去。

【劉逵注】『吳越春秋』に曰く、越に処女有り、南林の中より出づ。越王使を使はして聘問するに劍戟の事を以てす。処女將に北のかた越王に見へんとす。道に老翁に逢ふ。自ら袁公と稱す。袁公 処女に問ふ

「吾聞く子は善く剣術を為すと。願はくは一たび之れを觀ん」と。女曰く、「妾敢へて隠す所有らず。唯だ公よ之れを試みよ」と。是に於いて袁公即ち跪き、劍を抜きて篠筵竹を斬る。竹槁は折れて地に墮つ。処女末に接し、袁公本を操り、以て処女に刺さんとす。処女節に応つて之れに入むこと三尺、因りて杖を挙げて之れを撃たんとす。袁公即ち飛きて樹に上り、化して白猿と為り、遂に別れ去る。

「左思『吳都賦』その二二五句～二二六句、およびその注」

(* 筆者注：この注の字句は日本旧鈔本『集注文選』によって一部を改めた。)

『吳越春秋』は後漢の趙曄撰とされる。これらの注は、左思の作品を読み解く上で特に補助となるものではないが(上記の注も単に「爰父」という語の説明のためのものである)、西晋時代の人々の関心がどのようなものに向けられていたかを知る上で、大変貴重な資料と言える。三国の動乱が平定され、司馬氏による統一王朝(晋)が建てられた時、『三国』の更に周縁地域に住む人々は中国への関心を持ったのだが、同時に、中国の知識人たちもまた、それらの周縁世界のさまざまな異文化に徐々に興味を懐き始めたのである。

このことは晋代に突如として勃興するさまざまな新しい文学動向とも浅からぬ関係を持つであろう。例えば、郭璞(二七六～三四一)の『山海経』や干宝の『搜神記』、また「桃花源記」を著し中国文学の中にユートピアへの憧憬を典型化させた陶淵明(三六五～四二七)の文学も、かかる時代の潮流の所産と言える。朝鮮半島や日本が『漢籍』に目覚めた頃、中国もまた「域外」の世界に目を向け、その文学的想像力を羽ばたかせたのである。

最後に「吳都賦注」の中に発見される興味深い記述を一つ紹介したい。「吳都賦」第二六二句「椰葉無陰(椰葉に陰無し)」に付された注で、現在は日本旧鈔本『集注文選』にのみ残存する注釈「文選鈔」からの引用である。

異物志云、椰子有兩眼。俗人謂之越王頭。

『異物志』に云く、椰子に両眼有り。俗人之れを越王の頭と謂ふ。

この一文は、中国でも『太平御覽』巻九七二「椰」条にも楊孚『異物志』の記述として見え、間違いなく元来も『異物志』にあつた記述である。ところで、八世紀の日本の古都奈良の正倉院には、当時の日本皇室に集められた内外の多くの宝物が現在もその輝きを失わず收藏されているが、その中に椰子の実を剥り抜いて作った一個の素朴な調度品が存在する（次頁写真参照）。この椰子の実の調度品は、恐らくその当時、東南アジアのいづこかの島国から伝来したものであろうが、この『異物志』の記述から、これは恐らく当時の東南アジアのどこかの部族において、その地域の芸能として用いられていたものであり、はるばる海を越えて日本に送り届けられたものだと推測される。また同時に、中国にもそれを用いた演劇（戯劇の一部か？）が伝えられていたことが、これらの文献から判明する。この記述は、つい先日、私の大学院での会談において目睹したものであるが、これを読んだ一瞬間、古代中国と日本、そして東南アジアの島々が、私の脳裏に活き活きと結びついてゆくような幻想を懐いた。

「附記」本稿は二〇一〇年三月、上海の復旦大学での講演「漢籍初伝日本与馬之淵源關係考」に基づくものである。招聘いただいた復旦大学中文系の祝克認教授、陳引馳教授、また同古籍研究所の陳正宏教授に重ねてここに鳴謝したい。以下にその講演時の中国語訳文を掲載するが、これは本学の陳翀専門研究員によるものである。併せて感謝する。

また本稿の概略は、その後二〇一〇年五月、香港中文大学で開催された「中国古代文学理論國際學術研討会：註釈、比較と建構」、さらに二〇一〇年七月、韓国の高麗大学校で開催された「中国古代文化と東アジア」の二つの國際學術シンポジウムでも口頭発表の機会を得た。貴重なご意見を下さったそれぞれの学会参加者にも感謝したい。



正倉院御物「椰子実」

本稿の内容は、拙著『漢籍伝来 白楽天の詩歌と日本』（二〇一〇年、勉誠出版）第一部「漢詩のきた道」に述べたことと一部重複するが、中国そして韓国の研究者向けに、資料を大幅に増補し加筆している。最後に、本頁の正倉院御物の写真の掲載に当たっては、宮内庁正倉院事務所また奈良国立博物館資料室のご協力を得た。併せて感謝したい。

漢籍初傳日本與馬之淵源關係考

靜 永 健（原著）
陳 翀（華譯）

『漢籍』（中國的書籍）傳入日本始於何時？又是以一種什麼樣的途徑、什麼樣的方式傳入日本？

現在看來，古代中國的高度文明與先進的科學技術傳入尚未開化的『倭國』，就宛如高山之水流入低谷，不外乎是一種情理所當然之事。但實際上，漢字最初傳入日本到漢文化為日本所接受，還是經歷了一段令我們難以置信的艱難而漫長的時光。

漢字傳入日本之前，可以說日本還是一個無文字社會。也就是說，生活在這塊區域的人們雖然擁有一套通過聲音來進行交流的言語系統，但尚未萌生出要把這些口誦言語記錄下來的意識。對於連對沒有電燈的地方都會感到驚訝的現代都市人來說，或許這一段原始的時光已經逸離了我們通常的思考範圍。其實，即使是在今日，非洲以及東南亞的一些少數民族中依舊存在着沒有無文字的社會。而在兩千年之前的日本以及朝鮮半島，無疑也經歷過這個被歷史學家稱作『原始』的階段。

那麼，生活在一個無文字社會中的人們，最初是通過一種什麼樣的方式、以一種什麼樣的態度來接觸到『文字』的呢？為何會對一種生活中並無實際需要的『文字』產生興趣呢？而且，又是通過一種什麼樣的方法來學會使用如此難讀費解的『漢字』的呢？或許這是一些已經很難究明的問題，但毫無疑問，這也都是些研究漢文化圈形成之時所必需解決的根源問題。今天我就就此來談談我的一些淺見。雖然有些看法還沒有脫離出推測的領域，但我還是願意將其闡述出來，拋磚引玉，以求得各位專家學者的指正。

一 漢字與漢籍之東傳時期

『漢字』何時傳入日本？日本人又是何時開始掌握『漢字』的聽說讀寫？

探討以上這兩個問題之最重要的原始資料，就是從我所居住的位於九州北部福岡出土的一枚金印，學界一般將其稱爲『漢倭奴國王金印』。

據范曄（後漢書·東夷傳）所記，這枚金印是建武中元二年（公元五七）東漢光武帝下賜給倭國（倭奴國）使者的信物，也是在日本被確認刻有漢字的時期最早的文物。這枚金印在中日交流史上具有非常重要的地位。（後漢書·東夷傳）記事如下：

建武中元二年，倭奴國奉貢朝賀，使人自稱大夫，倭國之極南界也。光武賜以印綬。安帝永初元年（二〇七），倭國王帥升等獻生口百六十人，願請見。（後漢書·東夷傳）

然而，在這裏我想強調的是，『漢字進入日本』與『漢籍傳入日本』並不是同一歷史層面上所產生的兩個並行的現象。也就是說，只刻有五個字的金印並不能證明當時的人們就已掌握了較高的漢字處理能力。這從中國方面的早期史料也可以得到旁證，陳壽《三國志》中有關日本的記載與范曄《後漢書》大致相符，其中都提到倭國女王之名爲『卑彌呼（音作 hi-mi-ko）』。這明顯還只是一個由漢人所記錄下來的音讀記號，由此知東漢時代的倭人還沒利用漢字的習慣。換句話說，雖然當時的倭人具有不少通過金印與銅鏡銘一類的器物來接觸到漢字的機會，但並不就等於他們能夠獨立地讀懂這些銘文以及書寫漢字文章（因為在實際生活中他們根本就沒有這個必要）。讓我們再來看看下面一

段引自《三國志·魏書·倭人傳》中的文章，與上文一樣，標有下線部分的詞語爲其所記錄的倭國王以及使者之名：

景初二年六月，倭女王遣大夫難升米等詣郡，求詣天子朝獻，太守劉夏遣吏將送詣京都。其年十二月，詔書報倭女王曰：「制詔親魏倭王卑彌呼：帶方太守劉夏遣使送汝大夫難升米，次使都市牛利奉汝所獻男生口四人、女生口六人、班布二匹二丈，以到。汝所在踰遠，乃遣使貢獻，是汝之忠孝，我甚哀汝。今以汝爲親魏倭王，假金印紫綬，裝封付帶方太守假授汝。其綬撫種人，勉爲孝順。汝來使難升米、牛利涉遠，道路勤勞，今以難升米爲率善中郎將，牛利爲率善校尉，假銀印青綬，引見勞賜遣還。今以絳地交龍錦五匹、絳地縵粟罽十張、蒨絳五十四匹、紺青五十匹，答汝所獻貢直。又特賜汝紺地句文錦三匹、細班華罽五張、白絹五十匹、金八兩、五尺刀二口、銅鏡百枚、眞珠、鉛丹各五十斤，皆裝封付難升米、牛利還到錄受。悉可以示汝國中人，使知國家哀汝，故鄭重賜汝好物也。」

從文中所記倭國使者之名，我們可以再次確認到當時的日本還停留在一個「無文字社會」。這種狀態一直延續到數百年之後，倭人才打破了將大陸文明拒之於外的僵局，開始進入了一個能藉由閱讀漢文書籍、獨自運用漢字的新的歷史層面。這種變化首先被反映在了下引的兩段沈約《宋書·倭國傳》及《梁書·倭國傳》的記錄之中，從這兩段史料可以看出，倭王的名字已經不再是某個隨意的諧音文字（甚至是某些貶義詞），而是一個與「王」之地位相稱且具有實際含義的「名字」。並且史料還記載了倭王對中國皇帝提出加封「安東將軍、倭國王」之要求，這也在另一個側面證明了當時日本已通過各種渠道對中國的政治文化有了很深的了解。由此我們可以推測出，日本的「漢籍傳來」，就是發生在從「卑彌呼」（3世紀）到「讚」（5世紀）中的某一個時間段。

倭國在高麗東南大海中，世修貢職。高祖永初二年，詔曰：「倭讚萬里修貢，遠誠宜甄，可賜除授。」太祖元嘉二年，讚又遣司馬曹達奉表獻方物。讚死，弟珍立，遣使貢獻。自稱使持節，都督倭百濟新羅任那秦韓慕韓六國諸軍事、安東大將軍、倭國王。表求除正，詔除安東將軍、倭國王。珍又求除正倭隋等十三人平西、征虜、冠軍、輔國將軍號，詔並聽。二十年，倭國王濟遣使奉獻，復以爲安東將軍、倭國王。二十八年，加使持節，都督倭新羅任那加羅秦韓慕韓六國諸軍事，安東將軍如故。並除所上二十三人軍、郡。濟死，世子興遣使貢獻。世祖大明六年，詔曰：「倭王世子興，奕世載忠，作藩外海，稟化寧境，恭修貢職。新嗣邊業，宜授爵號，可安東將軍、倭國王。」興死，弟武立，自稱使持節，都督倭百濟新羅任那加羅秦韓慕韓七國諸軍事、安東大將軍、倭國王。順帝昇明二年，遣使上表曰……。

（宋書·倭國傳）

漢靈帝光和中，倭國亂，相攻伐歷年，乃共立一女子卑彌呼爲王。彌呼無夫婿，挾鬼道，能惑衆，故國人立之。有男弟佐治國。自爲王，少有見者，以婢千人自侍，唯使一男子出入傳教令。所處宮室，常有兵守衛。至魏景初三年，公孫淵誅後，卑彌呼始遣使朝貢，魏以爲親魏王，假金印紫綬。正始中，卑彌呼死，更立男王，國中不服，更相誅殺，復立卑彌呼宗女臺與爲王。其後復立男王，並受中國爵命。晉安帝時，有倭王贊。贊死，立弟彌。彌死，立子濟。濟死，立子興。興死，立弟武。齊建元中，除武持節，督倭新羅任那伽羅秦韓慕韓六國諸軍事、鎮東大將軍。高祖卽位，進武號征東大將軍。

（梁書·倭國傳）

日本的歷史學家一般將文中所提到的「讚（贊）」、「珍（按：《梁書》中的「彌」當爲後世轉抄時對「珍」之異體字「玠」的誤抄）」、「濟」、「興」、「武」並稱爲「倭之五王」。最後一位被稱爲「武」的倭王，一般被認爲是指日本第二十一代雄略天皇（在位期間大致爲四五六—四七九）。從現階段出土的一些文物來看，雄略天皇時代的日本已經具有

很高的漢文化水平了。譬如，考古學家從位於東京北面的埼玉縣行田市稻荷山古墳出土的鐵劍上發現了一段記有雄略天皇和名的金鑲嵌銘文。銘文如下：

辛亥年（公元四七一）七月中記。乎獲居（o-wa-ke）臣，上祖名意富比埜（o-to-hi-ko）、其兒多加利足尼（ka-ka-li-suku-ne）、其兒名曰已加利獲居（te-yo-ka-li-wa-ke）、其兒名多加披次獲居（ta-ka-hi-shi-wa-ke）、其兒名多沙鬼獲居（ta-sa-ki-wa-ke）、其兒名半曰比（ha-te-hi）、其兒名加差披余（ka-sa-hi-yo）、其兒名乎獲居（o-wa-ke）臣，世々爲杖刀人首，奉事來至今，獲加多支鹵（wa-ka-ta-ke-ru）大王（即雄略天皇）寺在斯鬼（shi-ki）宮時，吾左治天下，令作此百練利刀，記吾奉事根原也。
〔以上反面〕

在這正反兩篇銘文之中，除了人名、地名使用的還是倭語的諧音漢字，包括紀年等其他部分均顯示了作文之人具有很高的漢文素養。可以看出，漢字文化正逐步向日本滲透並爲王室所接受。

還有一把出土於九州島中部熊本縣玉名市江田船山古墳的雄略天皇鐵劍，這是一把銀鑲嵌鐵劍，劍背銘文如下：

治天下獲加多支鹵（wa-ka-ta-ke-ru）大王世，奉事典曹人，名无利曰（mu-ti-te）。八月中，用大鉄釜，並四尺廷刀。八十練，九十振，三寸上好刀。服此刀者，長壽子孫洋々，得恩也。不失其所統，作刀者名伊太和（yi-da-wa），書者張安也。

這兩把鐵劍，一把出土於日本的關東平原，一把出土於九州島，由此可以證明當時倭王的統治至少已經具備了現

今日日本一半以上的國土面積。另外，還值得一提的是九州出土的鐵劍銘文未標有『書者張安』一語。『張安』是一個中國名字，這表明其極有可能是一位從中國（或者朝鮮半島）移居日本的『渡來人』。從其他史料亦可得知，這一時期有大批的『渡來人』來到日本。正是這批具有漢文化背景的『移民』，成爲了日本漢字文化確立的筆路藍縷。在後文還要談到，出於對這些外來『老師』的崇拜，當時的日本倭人開始對孕育了這些技術高超的『移民』之漢字文明產生了興趣，終於邁出了究讀漢籍、接受漢文化熏陶的艱難一步。

二 日本人初讀漢籍之時期考

縱觀世界文字文化，也很難找到比漢字更複雜更抽象的文字了。如果沒有絕對必要，很難想像域外民族會在一種無意識的狀態下去挑戰學習如此深奧的文字。過去常常將漢字的海外傳播簡單地歸結其爲一種『優秀的文明』，顯然，這並不能成爲漢字文化濫觴的根本理由。諸如前面所提到的『金印』就是一個實證，『金印』的存在顯示了當時日本與中國已經建立了密切的聯繫，但種種跡象表明，當時的日本人並沒有激發出學習漢字、閱讀漢籍的熱情。

那么，日本人又是從何時開始究讀『漢籍』的呢？在探討這個問題時，首先有必要提及日本古文獻——《古事記》與《日本書紀》中的相關記載：

百濟國照古王，以牡馬一疋，牝馬一疋，付阿知吉師以貢上。亦貢上橫刀及大鏡。（應神天皇）又科（卍詔）賜百濟國：「若有賢人者，貢上。」故受命以貢上人。名和邇吉師。卽《論語》十卷，《千字文》一卷並十一卷付是人即貢進。

《古事記·應神紀》

十五年秋八月壬戌朔丁卯。百濟王遣阿直岐貢良馬二匹，即養於輕坂上厩，因以阿直岐令掌飼。……阿直岐亦能讀經典，即太子菟道稚郎子師焉。天皇問阿直岐曰：「如勝汝博士亦有耶？」對曰：「有王仁者，是秀也。」時遣上毛野君祖荒田別、巫別於百濟，仍徵王仁也。……十六年春二月，王仁來之。則太子菟道稚郎子師之。習諸典籍於王仁，莫不通達。故所謂王仁者是書首等之始祖也。是歲百濟阿花王薨。《日本書紀·應神紀》

兩書均用漢文書寫而成，除了地名人名還是使用諧音表記之外，其文法也相當獨特。不過，如將兩文互讀，還是可以大致勾勒出其所敘事之脈絡：第十五代應神天皇時，從朝鮮半島南部百濟王國貢來了雌雄兩匹駿馬以及刀劍、銅鏡，隨着這兩匹駿馬一起來到日本的還有一位專職養馬的從員。此人（阿知吉師，一作阿直岐）在來日之際隨身攜帶了某種「漢籍」，而且在日本期間也經常誦讀之。此舉引起了皇太子菟道稚郎子的興趣。受其影響，皇太子也隨之開始學習這些書籍。

日本人最早究讀漢籍的竟然是一位年未總角的兒童！雖然有些意外，但這兩條史料的確提到了漢籍初傳日本之時期以及初讀之人物。這兩則文獻，我想基本可信。其一，要習得漢字漢語且掌握漢文之閱讀技巧，對於十歲以上的古人來說，無疑是一件至難之事。但對於一位纔剛通曉人事的五六歲幼童來說就簡單多了。其二，更重要的是，教授漢字的不是中國人，而是一位來自朝鮮半島的「百濟國」人。如果是來自大陸的文人，其所教授的漢字、漢文一定是一種正式的漢文。然而，從日本古歌集《萬葉集》也可以看出，早期日本人所使用的漢字以及文法相對隨意，並沒有形成一個嚴謹的系統。這也從另一個側面證明了古代日本人在很長一段時期是向與自己言語系統相近的朝鮮人學會漢字漢文的。因此我認為以上史料所記載的並非傳說，這位菟道稚郎子（按：其名字之意為「封地為宇治的小皇子」），就是最先開始閱讀漢籍並且掌握了漢文的日本人。

那麼，菟道稚郎子又是於何時開始學習漢籍的呢？《日本書紀》記為應神天皇十五年之事，但此書紀年比較混亂，

不可全信。《古事記》則記為百濟照古王時，但這位「照古王」，又無法斷定其究竟是第五代「肖古王」（在位一六六・二二三），還是第十三代「近肖古王」（在位三四六・三七四）。我認為《日本書紀》的文未提到的「是歲，百濟阿花王薨」纔是解決這一紀年問題的關鍵。「阿花王」指百濟第十七代「阿莘王」。朝鮮半島的史書《三國史記》記其死於公元四〇五年九月。由此可以確定王仁來到日本就是此年，阿直岐到達日本則是兩三年前之事。順便提一句，公元四〇五年，也就是中國東晉王朝末的安帝義熙元年，正是這一年，陶淵明辭去了彭澤令，在歸鄉途中寫下千古聞名的《歸去來辭》。言歸正傳，從以上分析可知，正式擔任菟道稚郎子的漢文老師百濟儒學博士王仁為其選擇的入門教材是《論語》和《千字文》，但沒有明記此前菟道稚郎子在阿直岐處所閱讀的《經典》之名。也許在當時這是一本人人皆所知的書籍，史家認為無須花費筆墨來為其留名。但史家的這種敘事方法，卻為今人解讀歷史帶來了很大麻煩。因為這本《經典》，纔是日本人最初接觸到的漢文典籍！而且，一位養馬之人為何要在異國他鄉如此熱心地研究《漢籍》，這一舉動本身就令人匪夷所思。

從兩則史料的前後文脈來看，可以確定菟道稚郎子跟隨阿直岐閱讀的不是字書與儒家典籍。那麼，又是何種書籍有資格被古代日本人尊稱為《經典》呢？我推測其乃是一部名為《相馬經》的實用典籍。如此而來，就不難理解阿直岐為何要在養馬之餘究讀這部典籍了，因為這本身就是司馬之人的必修之課（馬或馬車在當時乃是最高階層的皇家貴族之騎乘之物）。《相馬經》一書現已散佚，只剩下些吉光片羽散見於各類書籍之中。讓我們先看此中的一則佚文：

〔相馬經〕云：一筋從玄中出，謂之蘭筋。玄中者，自上陷如井字。蘭筋堅者千里。

（文選41・陳琳 為曹洪與魏文帝書 李善注所引）

百濟國王令阿直岐攜兩頭雄雌駿馬進貢到日本，且命其幫助日本王室飼養這兩匹馬，無疑包含了雙方王室希望讓這兩匹馬在日本繁衍的意圖。而當仔馬出生之時，這類《相馬經》便成為了判斷新生馬之優劣的最重要的指南書了。

當然，馬有吉相，就必有凶相，如果這兩匹馬產下的是以下之馬，我想，阿直岐一定會禁不住捶胸長嘆了。

〔伯樂相馬經〕曰：馬白額入口至齒者，名曰「榆雁」，一名「的盧」。奴乘客死，主乘棄市。凶馬也。

〔世說新語·德行篇·劉孝標注所引〕

有可能在我們的知識範疇之內，〔相馬經〕只是一部微不足道的佚書。但在兔道稚郎子的時代，〔相馬經〕事關王權尊嚴，對於古代日本人來說，甚至可以說是一部比儒家經典更「經典」的實用之書。

其實在稍前一點的三國鼎立的時代，中國大陸也同樣流行駿馬崇拜，相信這本〔相馬經〕當時也是倍受時人推崇。譬如，〔三國志〕所提到的英傑呂布假愛騎赤兔馬之勇無敵天下一事，在日本的年輕人之中也廣為人知。赤眼如兔，其馬名當源自這個與普通馬之不同的顯著特徵。除了赤兔馬之外，陳壽〔三國志〕中還記載了不少相馬軼事。如〔魏書·方技傳〕中提到的朱建平便是一位相馬名家。他曾一眼便預言魏文帝曹丕的愛馬命不過當日。果然此後不久，此馬受文帝熏衣香的刺激發狂咬傷了文帝膝蓋，文帝大怒殺之，朱建平也以此名揚天下。其實，相馬之法及相關書籍無疑在很早就已經存在（譬如湖南省馬王堆就曾出土過被視為〔相馬經〕的竹簡），但三國連年的戰亂使得這一時期的人們對於駿馬及相馬之書倍加崇拜。也恰好正是在這個戰亂的年代，相馬之書與駿馬一起，傳播到了周邊區域的王族手中，再經由朝鮮半島，終於在五世紀初期傳入了日本。

讓我們再來關注一則軼事，即赫赫有名的三國英雄劉備的「的盧馬」故事：

〔世語〕曰：備屯樊城，劉表禮焉。憚其為人，不甚信用。曾請備宴會，蒯越、蔡瑁欲因會取備。備覺之，偽如廁，潛遁出。所乘馬，名的盧，騎的盧走。墮襄陽城西檀溪水中，溺不得出。備急曰：「的盧！今日厄矣。可努力。」的盧乃一踊三丈，遂得過，乘桴渡河。中流而追者至，以表意謝之曰：「何去之速乎。」

此事在《三國演義》中也大有演繹，人所皆知，在這裏就不再多作口舌了。只是這匹救了劉備一命的『廬馬』，據《伯樂相馬經》記載乃是一匹「奴乘客死，主棄棄市」的超級凶馬。為何劉備還要一直騎着它南征北戰呢？我估計當時所傳的《相馬經》並非一部單純的看良馬相的指南書，可能還記有大段如何來對付一匹驍勇卻相貌不吉的『凶馬』的秘法。

自己的愛馬如果是一匹『吉馬』，那當然萬事無虞。萬一有一天突然發現自己的愛馬原來是一匹『凶馬』，那又該怎麼辦呢？我想，正是類似這種對天地自然萬物的不安，纔是促使漢籍以及其所記錄的古代中國傳統思想逐漸擴散到東北亞洲各地區的又一直接原因。「原來漢籍這麼實用！」「讀了漢籍，原來可以過上如此安心的生活！」正是這種素樸的感受，纔是漢籍突破時空局限，在朝鮮半島、日本以及亞洲各周邊地區得到廣為傳播的原動力。

馬的故事，其實就蘊含了深刻的哲學。在中國的古典之中，『廬馬』故事還存在着另一版本。前引《相馬經》佚文之《世說新語》德行篇本文云：

廬公乘馬有的廬。或語令賣去。廬云：「賣之，必有買者，即當害其主。寧可不安己，而移於他人哉。昔孫叔敖殺兩頭蛇，以為後人，古之美談。效之，不亦達乎。」

在這兩個故事之中，對於上天通過『凶馬』給自己安排的厄運，廬亮與劉備一樣，不是選擇逃避——將馬處理掉，將厄運轉換給他人。而是坦然面對現實，選擇自我受難，最終以自我的德操克服厄運，轉危為安。在《世說新語》中對於廬亮故事，劉孝標還特意加注了一則楚令尹孫叔敖的舊事來對此予以說明：

賈誼《新書》曰：「孫叔敖爲兒時，出道上，見兩頭蛇，殺而埋之。歸見其母泣，問其故。對曰：『夫見兩頭蛇者必死。今出見之，故爾。』」母曰：「蛇今安在？」對曰：「恐後人見，殺而埋之矣。」母曰：「夫有陰德，必有陽報。爾無憂也。」後遂興於楚朝，及長爲楚令尹。

（世說新語·德行篇·劉孝標注所引）

「夫有陰德，必有陽報」，也就是說凡事多爲別人着想，這纔是解決厄運的唯一途徑。人間命運自有禍福，此乃天定。但如能保持一種坦然的心態，即可轉危爲安，成爲人中之貴。這種思想，與《淮南子》人間訓所記「塞翁失馬，之事亦有幾分共通之處。可以說在中國古典之中，還真不乏有關於馬的寓言故事！我想，起源於中原的中國傳統思想之所以能夠如此深入波及到周邊民族，這種通曉明白的寓言（譬如馬的故事）發揮了極爲重要的作用。

正是在這種時代背景下，與生活有密切的實用漢文典籍與其所記錄的先進技術一起先進入了中國的周邊區域，讓沒有文字的周邊民族產生了對漢字文明的憧憬，隨後以《論語》爲嚆矢，中國古代思想迅速地在這些周邊地區也得深入傳播，漸次形成了一個以漢籍爲載體的漢文化圈。而這兩則記錄於日本古代史書之中的馬與漢籍的故事，正爲我們還原了漢文化圈形成的一個基本模式，提供了一個實例讓我們來對漢文化圈形成之根本原因的進行反思。

再附言幾句，大家一定有興趣想知道這位日本最初讀漢籍的皇子菟道稚郎子之後的命運。在王仁手下習得了豐富的漢文化知識的菟道皇子，因其卓越的見識而被王室挑選爲皇太子。但是，已經深深受到了儒家思想熏陶的皇子卻認爲一個健全的國家應該遵守「長幼有序」，他自己不是長子之由堅決拒絕繼位。而且爲了不讓國家出現權力的真空毅然選擇了自殺。這一舉動，讓人不禁想起《史記》伯夷叔齊列傳。而因皇子之死而登上天皇之位的仁德帝，繼承了皇子弘揚儒學的遺愿，最終成爲了日本歷史上最爲有作爲的明君典范。在仁德帝去世之後，爲了彰顯他的豐功偉績，王室爲他建造了一所最大規模的前方後園墳（大阪府堺市大仙陵古墳）。而這位與菟道皇子一起被後人所崇拜的仁德帝，毋庸置疑，也正是與皇子一起閱讀漢籍、接受漢文化熏陶的第一批日本人中的一位！

三 三至五世紀的中國文學與周邊世界

到此為止，我們的話題主要集中在中國的漢籍文化是於何時通過什麼途徑傳入朝鮮半島與日本的這一問題上，最後，讓我們來談談這一時期的中國本身文學的發展狀況。

凡事必有互動。當漢籍傳入倭國，倭人開始逐漸意識到接受漢文化之重要性的時候，其實中國的知識階層也在開始對中國的周邊世界予以關注。其中最著名的當屬陳壽《三國志》地理志中的相關記述。直到今天，解讀對證其所留下的《魏書·倭人傳》還是日本古代史研究的重要一環。但我認為研究當時中國知識階層的周邊意識還不能只局限於史書，應該將視野擴展到內容更為廣泛的文學作品之中。《文選》所收的左思《三都賦》就是最好的一個例子。在《三都賦》、特別是《吳都賦》中，不僅對吳都（南京？或者蘇州？）進行了鋪陳描寫，還對孫吳政權所支配的廣袤疆域進行了縷述：

島嶼綿邈，洲渚馮隆。曠瞻迢遞，迴眺冥蒙。珍怪麗，奇隙充。徑路絕，風雲通。洪桃屈盤，丹桂灌叢。
瓊枝抗莖而敷藥，珊瑚幽茂而玲瓏。

左思《吳都賦》其一三九、一五〇句

雖然我們還不能斷定這一部分的描寫就是日本群島，但無疑這是一段對遠離大陸、漂浮於海中之群島的描寫。由此可以推知，日本以及東南亞的這些「島嶼之國」，對於當時的中國知識階層來說，已經從古典的神話世界走向現實，頻繁的國際來往使得這些周邊地區的風土人情正逐漸變得清晰可視。

可以想像，當時的人們對《三都賦》的傳抄閱讀，遠不止局限於本文，還應當包括了皇甫謐的序文以及劉逵、張

載、衛權（權）等同時代人的注解（這便使得《三都賦》變成了一篇鴻篇巨制）。西晉人爭先恐後地抄寫《三都賦》，以致使得洛陽的紙價暴漲，也顯然不單是被其文華麗彩所吸引。我在九州大學大學院爲碩博士生所開設的專業課中，每個星期都有一門專門閱讀《三都賦》的演習課。通過對所有版本文字校勘、出典確認、語義解釋的工作，我們注意到其注語並非只是一種對原文字句的機械詮釋，而是包含了大量原文以外的信息，直可比爲一部小型的百科全書。

其竹則筴管箨，桂箭射筒。袖梧有篔，篔篦有叢。

〔吳都賦〕其二四三、二四六句

【劉逵注】〔異物志〕曰：筴管，生水邊，長數丈，圍一尺五六寸，一節相去六七尺，或相去一丈。廣陵界有之，始興以南又多。小時，夷人績以爲布葛。……篔竹，有毒。夷人以爲觚，刺獸，中之則必死。

劉逵注中所引《異物志》所提到的「夷人」專指的何方民族，雖已無從考證。但其描寫的極有可能就是包括日本在內的非漢人集團的奇風異俗。此外，注文中還不乏有與志怪小說相似的描寫：

其上則援父哀吟，獐子長嘯。

〔吳都賦〕其二二五、二二六句

【劉逵注】〔吳越春秋〕曰：越有處女，出於南林之中。越王使使聘問以劍戟之事。處女將北見於越王。道逢老翁，自稱袁公。袁公問處女：「吾聞子善爲劍術，願一觀之。」女曰：「妾不敢有所隱，唯公試之。」於是袁公卽跪，拔劍斬箨筴竹。竹槁折墮地。處女接末，袁公操本，以刺處女。處女應節入之三尺，因舉杖擊之。袁公卽飛上樹，化爲白猿，遂別去。

（按：此注文引自日本舊鈔本《集注文選》。）

〔吳越春秋〕據傳爲後漢趙曄所撰。這些注語，其實對解讀左思本文並無多大裨益，但卻是我們推測西晉時代知

識階層之興趣所在的一個重要線索。三國鼎立的亂世結束之後，司馬氏一統天下，建立了晉王朝。中原的統一與天下的太平使得三國以外的周邊區域對中國越來越關注嚮往，而與此連動，中國的知識階層也開始對周邊區域的風土人情表示出了濃郁的興趣，並不厭其煩地將之敍錄於筆墨。

這股新的時代潮流與晉代突如出現的諸多新的文學動向亦不無關聯。譬如郭璞的《山海經》與干寶的《搜神記》，甚至還可以算上以描畫出中國文學史上最富有盛名的《烏托邦》世界（《桃花源記》的陶淵明的文學創作。換句話說，在朝鮮半島與日本開始意識到學習《漢籍》之必要性的同時，中國也開始注視其《域外》的世界。正是這種關注激發了這一時代的文人的文學想象力，也為這一時代的文學作品更添上了一層富有魅力的神秘色彩。

最後，讓我來介紹一則非常有意思的記載。《吳都賦》第二六二句「椰葉無蔭」下，現存日本舊鈔本《集注文選》殘卷中保留着這麼一則注語：

《異物志》云：椰子有兩眼，俗人謂之越王頭。

這條文字，還見於《太平御覽》卷九七二「椰」條，基本可以確定原出自楊孚《異物志》。其實，在日本八世紀的古都奈良正倉院之中，當時的日本皇室所收集的寶物裏正好有一面用椰子做成的精美面具（參看照片）。這個椰子面具，極有可能就是當時從東南亞諸島傳來的貢物之一。根據《異物志》的介紹，這個面具在當時似乎是東南亞的島嶼民族們用來歌舞之物。在某一個時候，它飄洋過海被送到了日本，同時又在某一個時候，隨着到中國去進貢表演歌舞（或是雜戲的一種？）的隊列一起來到了中國。這一點，是我不久前在大學院的《文選》演習中才注意到的。正是在那一瞬間，古代中國與日本，還有東南亞島嶼，終於在我的腦海裏銜接成了一條絢麗多彩的文化鏈。